

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：82674

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730472

研究課題名（和文）退職者世代向けの次世代育成・継承観尺度の開発

研究課題名（英文）Evaluating intergenerational exchange programs:
Creating a Japanese version of the generativity scale

研究代表者

三隅 宏美（大場 宏美）（OHBA HIROMI）

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）

・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：70565572

研究成果の概要（和文）：本研究は、わが国の世代間交流プログラムを評価できる日本語短縮版 generativity 尺度を開発することを目的とした。予備調査において、日本語版および 4 項目 4 尺度（全 16 項目）の短縮版を作成した。4 項目 4 尺度の短縮版を用いて、本調査を実施した結果、本尺度の適合度は良好であった。さらに、既存尺度との併存妥当性を確認した。今後は、本尺度の信頼性・妥当性のさらなる検討を行い、高齢者による世代間交流プログラムの評価指標と成り得るか検証していくことが必要である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed at developing a Japanese version of generativity scale, which evaluate the effectiveness of intergenerational programs. In the pre-study, we created a shorter version of the scale that consisted 4 items 4 scales. Using factor analysis of searching, we confirmed that degree of this standard was good. Further study will be necessary to examine the reliability and validity of this scale to see for the evaluation of intergenerational programs by the elderly.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	2,200,000	660,000	2,860,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者・世代間交流・社会参加・generativity・尺度

1. 研究開始当初の背景

地域社会は、子ども、若者、成人、高齢者といったさまざまな世代で構成されている。世代間の問題というのは社会の成り立ちを考える上で重要である。近頃の若者は親世代の生活様式を拒否し、変化ばかりを追い求めていると嘆く風潮は根強い。現代は、その嘆きが諦めや無力感に変わり世代継承とは何

であるかを考えなくなりつつある「世代継承の危機」との指摘がある（今井, 2002）。また、近年、少子高齢化や若年層のニート・フリーターが深刻化するにつれ高齢者施策を支えるための若年層の負担が問題視される中で、高齢者が自己の利益のみを追求するアドボカシー活動を活発化させることは公共政策において世代間の対立を導きかねない

との指摘がある(藤原, 2006)。こうした世情を反映し、地域における世代間の共生・共益をねらった世代間交流の機会や取り組みが、保健・福祉・教育分野で進められてきた。しかし、分野間の縦割りシステムから、わが国ではこうした取り組みは珍しく、世代継承・世代間交流についての効果を定量的に評価する試みはほとんどなされていない。その理由の一つとして、世代継承・世代間交流を評価する尺度が提示されていないことがあげられる。そこで、本研究は、「Hopkins Generativity Index」(全27項目)を参考に、わが国の世代間交流プログラムを評価できる日本語短縮版 generativity 尺度を開発し、その妥当性について検証する。

2. 研究の目的

「Hopkins Generativity Index」の日本語短縮版を作成し、信頼性・妥当性の検討により、わが国の実情に即した簡便な generativity の尺度を作成する。さらに、作成した Generativity 尺度得点と高齢者の健康指標との関連を横断的に明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) 「Hopkins Generativity Index」の日本語版を作成

①日本語短縮版を作成

米国ジョンズ・ホプキンス大が開発した「Hopkins Generativity Index」を日本語に翻訳をした。「Hopkins Generativity Index」は、「人生について抱く考え」「日々の行動」「自分の人生に対する現在の考え」「自分の人生に対する過去の考え」を測定する4つの尺度からなる全27項目、6件法で構成されている。翻訳は、3名の研究者に依頼し、意味が食い違った部分の表現を、協議し調整した。次にその日本語版原案を用いてプリテストを実施し、各項目の平均および分散を確認した上で、日本語訳の修正を加え、最終的な日本語版を確定した。

②予備調査を実施

作成した「generativity 日本語短縮版尺度」を郵送調査で実施した。初版調査は、群馬県吾妻郡草津町、神奈川県川崎市多摩区、神奈川県横浜市の3地域、二版調査は東京都大田区の高齢者を対象に実施した。有効回答数は293件(男性100、女性193)、平均年齢は72.5歳(±5.9)、回収率67.2%であった。

③Generativity 日本語短縮版の妥当性の検討

作成した「generativity 日本語短縮版」が、短縮前の「Hopkins Generativity Index」の日本語版と構成概念が同質であるかを検討する。分析は、共分散構造分析を用い、因

子分析等を実施した。

(2) 本調査：地域高齢者への無作為郵送調査の実施

①調査を実施

予備調査をふまえ、4項目4尺度の「Generativity 尺度短縮版」および丸島らの改定版世代性関心尺度と改訂版世代性行動尺度の一部を無作為郵送調査にて実施した。対象は、滋賀県長浜市の地域高齢者3,000名を対象とした。有効回答数2092票(M: 1114、F: 878)、平均年齢71.8歳(±7.6)であった。

②構成概念的妥当性と併存的妥当性の検討

探索的因子分析により構成概念を確認した。さらに、仮説因子モデルでの尺度全体の構成概念の妥当性を検証するため、検証的因子分析を行った。併存妥当性を検証するため、既存の改訂版世代性関心尺度(丸島 他)における「世代継承性」および改訂版世代性行動尺度における「世代継承性承行為」との併存妥当性を確認した(表3)。

(3) 健康指標との関連の横断調査

作成した「Generativity 尺度短縮版」と健康指標との関連を横断的に分析した。共分散構造分析を用い、仮説モデルを検証した。さらに、多母集団同時分析を用い、性別によるモデルを比較した。標準化推定値の比は、一対比較を用いた。

4. 研究成果

(1) Generativity 日本語短縮版の作成

本研究において作成した日本語訳は、初版調査および二版調査において、回答の傾向に差がないことを確認した。さらにクロンバックの α 係数は、すべての因子で.85以上の高い値が示された。

そして、構成概念毎に因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い、因子負荷量が若干低い項目の除外および文化的背景、解釈可能性から総合的に判断し、4項目4尺度からなる短縮版を作成した(表1)。

(2) 地域高齢者への無作為郵送調査の実施

本調査においては、探索的因子分析により構成概念を確認した。クロンバックの α 係数は、すべての因子で0.85以上であった(表2)。さらに、仮説因子モデルでの尺度全体の構成概念の妥当性を検証するため、検証的因子分析を行った結果、本尺度のモデル適合性を示す各適合度指数は、GFI=0.933、AGFI=0.904、RMSEA =0.075を示した(図1)。

さらに、既存の改訂版世代性関心尺度(丸島 他)における「世代継承性」および改訂版世代性行動尺度における「世代継承性承行為」との併存妥当性を確認した(表3)。

表1 「Generativity 尺度短縮版」

「人生について抱く考え」	
1	新しい事や、新しい方法をつくりだしたい
2	自分の経験を他の人と分かち合いたい
3	若い人たちの良き助言者になりたい
4	将来にわたって他の人のためになるような何かをしたい
「日々の行動」	
1	自分の人生について若い人たちに語ることで、彼らを支援すること
2	自分自身の経験を若い人たちに語ること
3	若い人たちにアドバイスをすること
4	他の人に影響を与えるようなこと
「自分の人生に対する現在の考え」	
1	地域に役立つしている気がする
2	功績として残せることをしている気がする
3	世の中に恩返しをしている気がする
4	他の人の人生に影響を与えている気がする
「自分の人生に対する過去の考え」	
1	地域に役立つしている気がしていた
2	功績として残せることをしている気がしていた
3	世の中に恩返しをしている気がしていた
4	他の人の人生に影響を与えている気がしていた

表2 各因子の Cronbach's α 係数

因子	α 係数
人生について抱く考え	0.850
日々の行動	0.877
自分の人生に対する現在の考え	0.883
自分の人生に対する過去の考え	0.919

図1 4項目4尺度のモデル図

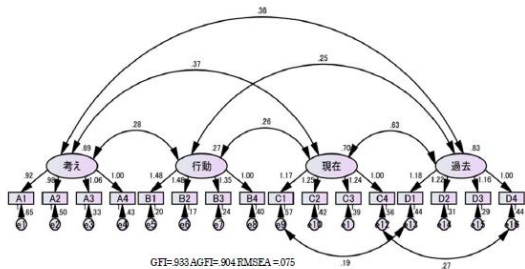


表3 改訂版世代性関心尺度・改訂版世代性行動尺度との相関

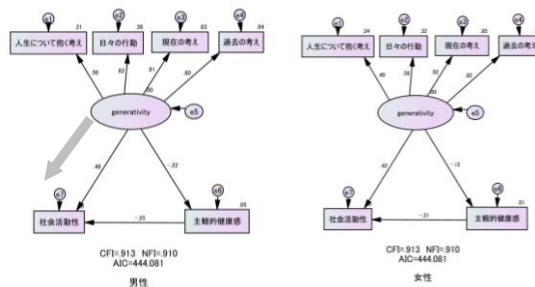
	M	SD	Generativity 尺度短縮版				改訂版世代性関心尺度	改訂版世代性行動尺度
			人生について抱く考え	日々の行動	現在の考え	過去の考え		
人生について抱く考え	16.1	3.8						
日々の行動	10.1	3.1	.570**					
現在の考え	11.1	4.4	.493**	.570**				
過去の考え	11.5	4.6	.434**	.497**	.772**			
世代継承性	11.6	2.3	.262**	.327**	.381**	.403**		
世代継承性行動	6.1	4.6	.236**	.338**	.274**	.252**	.172**	

(3) 健康指標との関連の横断調査

「Generativity 尺度短縮版」の下位尺度を直接変数とした『generativity』という潜在変数を作成し、「社会活動性」と「主観的健康感」の直接変数を加えたモデルを作成した。本モデルの適合度は、CFI=0.921、NFI=0.919であり、十分な適合度が得られた。さらに、全てのパスが有意であった。

性別の違いを明らかにするため、多母集団同時分析を行った結果、『generativity』から「主観的健康感」への直接効果は、男性が0.22、女性は0.12であり、統計学に男性の方が有意に大きい事が示された (CR=2.141) (図2)。

図2 「社会活動性」を規定するモデル (性別)



5. 研究成果のまとめと今後の展望

本研究で作成した「Generativity 尺度短縮版」は妥当性・信頼性ともに高いことが示された。また、「社会参加活動」を規定する健康指標との因果構造においては、「generativity」は、男性において有意な直接効果が明らかになった。

しかしながら、本尺度はまだ作成されたばかりであり、結果の安定性については引き続き検討する必要がある。また、高齢者における「generativity」と健康指標との関連はまだ検証を重ねる必要がある。

今後は本尺度のさらなる向上を目指した検討に加え、研究場面や臨床現場、地域において広く利用されるよう普及活動を実施する必要がある。

6. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

大場宏美・藤原佳典・村山陽・野中久美子ほか、世代間交流プログラムの評価に向けた日本語版 generativity 尺度作成の試み、日本世代間交流学会誌、査読有、3巻、2013、59-66

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 大場宏美・藤原佳典・村山陽、他、高齢者の generativity と主観的健康感との関連（仮）、第 72 回日本公衆衛生学会総会、2013 年 10 月 23 日、三重
- ② 大場宏美・藤原佳典・村山陽、他、高齢者向け generativity 尺度の開発の試み、第 21 回日本健康教育学会記述大会、2012 年 7 月 7 日、首都大学東京
- ③ 大場宏美・藤原佳典・西真理子、他、世代間交流プログラム REPRINTS-1. 参加高齢者のソーシャルキャピタル、第 69 回日本公衆衛生学会総会、2010 年 10 月 28 日、東京国際フォーラム

〔図書〕（計 1 件）

大場宏美、知っておきたい！今どきの小学校高学年・中学生のこと、（藤原佳典 監修）シニアから君たちへ「読み聞かせ」に託すころのリレー、80-94、ライフ出版、2010

〔その他〕

ホームページ等

<http://www2.tmig.or.jp/spch/index.html>

内にて研究成果を公開予定（2013 年度中）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三隅 宏美(大場 宏美) (OHBA HIROMI)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター（東京都健康長寿医療センター研究所）・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：70565572

(2) 研究分担者

なし（ ）

(3) 連携研究者

なし（ ）